

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 17 日現在

機関番号：14503

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530856

研究課題名(和文)第二言語のルール学習が母語の高次操作を創出するメカニズムの教育心理学的研究

研究課題名(英文) A psychological study of the mechanism in which second language rule learning creates a high level of understanding in the native language

研究代表者

吉國 秀人 (Yoshikuni, Hideto)

兵庫教育大学・学校教育研究科(研究院)・准教授

研究者番号：30343734

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円、(間接経費) 240,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は英語のルール学習場面における母語に関連する「素朴理論」からの干渉とその抑制に注目した研究である。「関係操作的思考」を取り入れたテキストを開発し、そのテキストを用いた英語のルール学習により、日本語の理解の深化が促されるメカニズムを探究した。ルール学習の結果、英語の否定疑問文への応答に対する確信度が上昇していた。日本語の「相対化」に関して、「いいえ」という語の使いやすさは、社会的関係性で変わるという回答が比較的多く選択された。日本語の「自覚化」に関して、はじめは視点がうまく切り替わらず、日本語の使い方の説明過程で混乱が生じたが、その後に視点が切り替えられたと推測できる反応が注目された。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on "naive theory": the rules of native language interfere and restrain the learners from understanding English language rules. We developed a textbook that includes "thinking by relational operation", and examined the mechanism in which English language rule learning affects understanding the system of the native language - Japanese. The results show that, after using the textbook, the learners gained confidence in their understanding of English, especially in regard to negative questions. With regard to "relativization" in Japanese, many learners stated that the ease of expressing negation depends on the social relationship between the speaker and the listener. Moreover, regarding "realization" in Japanese, some learners seemed to have initial difficulties in shifting viewpoints, but they became accustomed to the process by the end of the experiment.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：教育系心理学 第二言語 ルール学習 母語

1. 研究開始当初の背景

教授学習過程に関する教育心理学研究においては、自然科学のみならず、社会科学や人文科学領域の知識獲得場面に焦点をあてた研究がなされてきている。その中のひとつとして、第二言語習得における学習者の認識変容プロセスに注目した研究が挙げられる。例えば、日本語を母語とする学習者を対象にして、日本語の知識が英語学習に干渉することによって生起する誤りやその抑制について多様な研究が行われている。例えば、吉國(2010)では、学習者内要因のひとつとして「不十分な知識及びその適用」を含意して「素朴理論」という語が用いられており、本研究でも同様に素朴理論という語を統一的に用いる。そして、母語である日本語に関連する素朴理論に着目し、その素朴理論からの干渉とその抑制を含む「英語の応答に関する認知プロセス」解明のための研究をおこなった。

既に先行研究によって示されている以下の3つの知見、すなわち、「母語 - 第二言語間の視点切り替え」の教授方略により、素朴理論からの干渉が抑制されることが示されていること(吉國, 2010) 自然科学領域の問題解決場面で、関係操作的思考を促進する介入の効果が示されていること(伊藤・岡田, 2010) 関係操作的思考は、手がかり化操作(判断の証拠を表す命題に変換する操作)や逆操作、手続き化操作、因果操作の4種類に整理されること(工藤, 2010)という知見をふまえて、「母語 - 第二言語間の視点切り替え」と「関係操作的思考」を促す教授方略を具体化したテキストを新たに開発し、異なる課題状況下での英語の応答行動形成に及ぼす効果や、母語である日本語の「高次操作」の促進に及ぼす効果を明らかにすることが本研究では目指された。

2. 研究の目的

本研究の主たる目的は次の3つである。

(1) 素朴理論からの干渉が予想される英語の語用論的ルールの学習場面において、「母語 - 第二言語間の視点切り替え」と「関係操作的思考」という認知面の2要因に注目した教授方略を具体化しテキストを開発すること。

(2) テキストの効果の検証により、「視点切り替え」と「関係操作的思考」を促す教授方略が、異なる構造を持つ課題に対するルールの適用を促進することを明らかにすること。

(3) 英語の語用論的ルールの学習により、日本語の理解の深化が促進されるメカニズムについて、日本語の相対化と自覚化という「母語の高次操作」の観点から教育心理学的に解明することである。

3. 研究の方法

本研究には、個別のインタビューによる調査が含まれていた。そこで、インタビュー調

査の開始前に、研究代表者の所属する大学に設置されている研究倫理審査委員会に、研究倫理審査申請書を提出し、審査を受けた。その上で、被験者に対しては、下記のような諸事項について「研究実施説明書」を提示しながら口頭説明を行い、インタビュー調査に参加の全被験者から「同意書」にサインをいただいた。具体的には、研究の目的と意義について 研究方法の概要 プライバシーの保護について 参加辞退の機会の保証について 不利益防止への配慮がなされていることについて丁寧な説明を行い、同意を得た。

本研究全体では、英語のルール「応答者がある行為を行うのであれば“Yes”, 行わないのであれば“No”と応答すればよい」を学習する場面が取り上げられた。個別のインタビューに基づいた調査が2つ、集団で一斉行われた調査がひとつ、これらの調査に基づいた3つの研究が実施された。

(1) 研究1の方法は、以下のとおりであった。研究1では、事前調査 読み物読解 事後調査の順に7名の大学院生及び2名の学部学生、計9名に対する個別のインタビューを実施した。実施時期は2012年2月から6月であった。事前調査の概要は、英文法の面白さ、日本語のきまりや日本文化への興味、応答課題(抜粋版)、会話場面課題1及び2であった。読み物は、「英語と日本語の応答方法のちがいについて(6頁)」の冊子であった。「母語 - 第二言語間の視点切り替え」の工夫に加え、「関係操作的思考」を促すためきまりを変形しながら問題解決を行う工夫が、新たに取り入れられていた。事後調査では、事前の内容に加え、読み物内容の再認課題、発展課題、「いいえ」の使いにくさ批評課題、日本語応答の留意点説明課題(3名のみ実施)、読み物の感想についても尋ねた。

(2) 研究2の方法は、以下のとおりであった。研究2では事前調査 読み物読解 事後調査の順に、一斉調査が行われた。これまでに同内容の調査に「回答したことも概要を聞いたこともない」と回答した大学院生12名を分析対象者とした。実験の実施時期は2013年1月であった。事前調査の概要は、英文法の面白さ、応答課題(抜粋版)、会話場面課題1及び2、英語のきまりや文化への興味、日本語のきまりや文化への興味の評定であった。読み物は、「英語と日本語の応答方法のちがいについて(7頁)」の冊子であった。研究1とは異なる例文を用いて新たな読み物が作成された。さらに、読み物には、「関係操作的思考」を促すためきまりを変形しながら問題解決を行う工夫とともに、英語応答の意志選択をした際に、2色カードの選択という動作も伴って自身が伝えたい意志を再確認する工夫が、新たに取り入れられていた。事後調査では、事前の内容に加え、読み物内容の再認課題、「いいえ」の使いにくさ評定課題(理由選択あり)、読み物の感想についても尋ねた。

(3) 研究3の方法は、以下のとおりであった。研究3では、事前調査 読み物読解 事後調査の順に、個別のインタビューが行われた。3名の大学院生及び2名の学部学生、計5名に対するインタビューを実施した。5名のうち4名は、同内容の調査に「回答したことも概要を聞いたこともない」と述べ、1名は「回答したことはないが概要を聞いたことはある」と述べた。実験は2013年9月～2014年3月に実施した。事前調査の概要は、英文法の面白さ、応答課題(抜粋版)、会話場面課題1及び2、英語のきまりや文化への興味、日本語のきまりや文化への興味の評定であった。読み物は「英語と日本語の応答方法のちがいについて(7頁)」の冊子であった。研究2と例文は同一であったが、意思表示カードの裏に「英語で応答者の動作(I do または I don't)を記入してもらおう工夫」が新たに取り入れられていた。事後調査では、事前の内容に加え、読み物内容の再認課題、日本語相対化の評定課題、日本語自覚化の説明課題(日本語で「ええ」「いいえ」と応答する際に気をつける点を説明してもらおう課題)、感想を尋ねた。

4. 研究成果

(1) 研究1の主たる成果としては次の内容が挙げられる。

個別のインタビュー調査を行うことによって、読み物読解中の確信度の推移を調べることができた。確信度の評定平均は62.2% 82.2% 95.6%と推移していた。作成したテキストの学習場面において、英語の否定疑問文への応答に関わる回答が、徐々に確信を持って行っていた様相が示された。

読み物読解前の調査では複数場面に正しくルールが適用できた者は9名中2名のみだった。読み物読解後は9名中6名が3場面中2場面以上で正しくルールを適用できるようになっていた。さらに3場面全てに一貫正応答した完答型についても調べたところ、事前は9名中1名であったが、読み物読解後には9名中4名が完答型の回答となっていたことが示された。

読み物読解語のインタビュー調査において、日本語の相対化の様相についてはTable 1のようにまとめられた。

Table 1 日本語についての相対化の様相

課題への賛否	回答の型	回答の概要
どちらかという反対	意志伝達型	{考えは伝える}考えを伝えないと意見は伝わらない。 {意志を伝達する}自分がしたいかどうか伝えるだけ
概ね賛成	場面で変化型	{社会的関係で変化}社会的関係性による。 {場合で変化}場合による
	対応工夫型	{全否定しない対応}全否定せず、2通りあるという感じで。 {全否定しない対応}全否定せず、自分の言葉を付加する。 {一度受け止める対応}一度受け止め「でも」と言うのを納得させやすい
		{相手に気づかせる対応}自分の考えをありませず相手に気づかせる。
賛成	日本文化型	{否定しない日本文化}人を否定してはいけないというのが日本の文化だ。

課題文で示された言語学者の主張「日本語では『いいえ』という言葉は使いにくい」には、概ね賛成という立場が多く見られた。た

だし、その場合でも、社会的関係など場面によって変化するという回答のほかに、応答の際の対応を工夫することによって、日本語の特徴を肯定的に捉えられるとの指摘が複数提起された。

(2) 研究2の主たる成果としては、次の内容があげられる。

研究1とは異なる例文を用いて作成された読み物の読解中、「関係操作的思考」を促す場面直前において、英語の応答文と意志を示すカードの選択とが一致していた者を調べたところ、12名中11名が一致していた。ほとんどの学習者が、英語の否定疑問文への応答について、自身の振るまいとの一致という観点からも再確認しながら読み物読解が行っていた様子が見られた。

複数場面でルールを正しく適用した応答数の変化を調べた。読み物読解後に、3場面全てに一貫正応答した完答型は12名中2名に留まっていた。3場面のうち2場面に正応答できた者は12名中2名であった。また、英文法に関する面白さ評定においては、平均値が読み物読解前2.67点から読み物読解後3.08へと正の方向へと変化する傾向が見られた。

事後調査における日本語の相対化の様相を、賛否の評定とその理由から調べた。12名中5名が日本語では「いいえ」という語が使いにくいという筆者の主張に「やや賛成」であった。12名中5名が「どちらともいえない」という回答であった。「やや反対」は12名中2名に留まっていた。Table 1に準じてまとめたところ、「やや賛成」と「どちらともいえない」のいずれの場合にも共通して最も多く選択された理由としては、相手の地位など社会的関係性で変わるという「場面で変化型」であった。その次に共通して多く見られた理由は、全否定せず2通りの考え方があるという様な受け止めや、一度受け止めた上で「でも」というようにする「対応工夫型」の理由であった。一方、日本語に関して「自分の行為をしたいか否かの意志伝達にすぎない」という「意思伝達型」は少なかった。

(3) 研究3の主たる成果としては、次の内容があげられる。

研究3の読み物には研究2と同一の例文が用いられていた。研究1と研究2の読み物をふまえ、以下の工夫がなされている読み物が開発され、インタビュー調査に用いられた。具体的には、この読み物には、「母語 - 第二言語間の視点切り替え」と「関係操作的思考」という認知面の2要因に注目した教授方略が取り入れられていた。加えて、英語応答の意志選択をした際に、2色カードの選択という動作も伴って自身が伝えたい意志を再確認する工夫が取り入れられており、意思表示カードの裏には「英語で応答者の動作(I do または I don't)を記入してもらおう工夫」もなされていた。

読み物読解中に教示されたルールへの確

信度は、全員が80%以上と高く、読み物への興味深さも全員が5段階評定で4以上と高かった。また、読み物読解後に実施された読み物内容の再認課題にも、5名全員が全小問に正答できていた。

英語の語用論的ルールの適用については、事前では複数場面に一貫して正しくルールが適用できた者は1名のみだった。母語に関連する素朴理論からの干渉が推察された。事後では、5名中4名が、3場面中2場面以上で一貫してルールを正しく適用できるようになっていた。

日本語の自覚化については、英語圏応答者の視点から日本語圏応答者の視点へとスムーズに切り替えて説明がなされていると推測できる反応が見られた。他方、英語圏応答者の視点から日本語圏応答者の視点へとはじめはうまく切り替わらず、日本語の使い方の説明過程で混乱が生じたが、その後に視点を切り替えられたと推測できる反応も見られた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計2件)

吉國秀人，英語のルール学習が母語の高次操作に及ぼす影響 - 学生を対象としたインタビューに基づく検討 - ，日本教育心理学会第54回総会，2012年11月23日，琉球大学

吉國秀人，英語のルール学習における母語の相対化の様相について，日本教育心理学会第55回総会，2013年8月19日，法政大学

〔図書〕(計0件)

6. 研究組織

(1)研究代表者

吉國 秀人 (YOSHIKUNI HIDETO)

兵庫教育大学・学校教育研究科・准教授

研究者番号：30343734

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

吉國 典子 (YOSHIKUNI NORIKO)

研究者番号無し